

第26回 日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第26回日本動物児童文学賞には、106作品の応募があり、児童文学関係学識経験者（池川禎昭（現代日本少年文学の会主宰）による第1次審査を経て、動物福祉・愛護関係学識経験者（木村芳之（日本獣医師会理事（動物福祉・愛護部会長））、会田保彦（日本動物愛護協会評議員）、齋藤 勝（日本動物福祉協会副理事長）、椎野雅博（日本愛玩動物協会副会長）、須田沖夫（家庭動物愛護協会会長）や関係省庁関係者（田邊 仁（環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長）、清原洋一（文部科学省初等中等教育局主任視学官））等からなる第2次審査委員会を7月28日に開催し、下記のとおり入賞作品として、大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された（表彰式の模様は822頁参照）。

入 賞 作 品

【日本動物児童文学大賞】

「よっちゃん、ごはんだよ」 高森美由紀（青森県）

〈受賞理由〉 母と死別し、複雑な家庭環境の主人公が、いつも吠えられ、怖かった隣の家の犬の世話をすることになり、試行錯誤しながらも、やがて身近な存在になってゆく。主人公は、犬と心を通わせる体験を介して、それまで苦手としていた周囲の人々とのコミュニケーションがとれるようになる。人と動物だけでなく、人と人との関係も描いた物語となっており、ユーモアも交えながら、心の動きを描写した優れた作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「ウルフがおしえてくれたこと」 松田好子（東京都）

〈受賞理由〉 学校嫌いだだった主人公が、狼に似た犬のウルフとの交流を通じて獣医学生になるまでを描いているが、動物を飼育する際の覚悟や、飼い主としての責任を子供たちにもわかりやすい文章で表現しており、動物と子供たちの関係を上手に描写している。

「夢のかけはし」 くれまさかず（愛知県）

〈受賞理由〉 ヘビを題材とした珍しい作品だが、動物に対する感情や、怪我をした動物を助ける行動とその心情が、獣医師の父や、ヘビ嫌いの母との間の親子の会話を通じてよく表現されている。身近な動物との関係という面でも考えさせられる。

【日本動物児童文学奨励賞】

「鳥たちの時間」 尾崎 潤（大阪府）

〈受賞理由〉 主人公が自分の悩みをオオワシの観察を通じて解決する物語。少年の成長、立ち直りを素直に表現しており、野鳥観察の魅力もうまく描かれている。少年時代の1ページのような作品である。

「ミルティーがくれたコンパス」 芦沢美樹（静岡県）

〈受賞理由〉 北極圏を舞台に、環境指標となっているホッキョクグマを題材としたスケールの大きな冒険物語。北極圏への初航海の途上、夢の中でのホッキョクグマとの生活や、

主人公の心の変容をうまく描写している。

「グッドバディ」 柳澤みの里（東京都）

〈受賞理由〉 乗馬クラブの仲間、馬との関わりの中で母親の死の悲しみを主人公が克服していく過程が描かれている。登場人物、馬のキャラクター設定がしっかりとされており、主人公の心の葛藤もうまく表現されている。

「あの日、小箱にしまったもの」
みくにつぐえ（神奈川県）

〈受賞理由〉 身近な野鳥であるスズメの扱いについて教訓的に話が進められるが、子供同士の会話がスムーズで、季節感もあり、風景がよく見える作品である。スズメという小さな野鳥の命に対する2人の少女の気持ちの動きが繊細に書かれ、心打つものがある。

「ホープ ―希望の犬―」 高岡 純（埼玉県）

〈受賞理由〉 犬を飼うことの大切さ、犬が人と人とをつなぐ役割等を描いており、読後、温かな気持ちにさせてくれる。登場人物、各々の思いが素直に伝わる作品である。

なお、入賞作品のうち大賞、優秀賞作品を収録した「第26回日本動物児童文学賞受賞作品集」をご希望の方（1人1冊に限る）は、住所、氏名、電話番号、上記作品集希望と明記の上、切手400円分（送料）を同封し、下記送付先へお送りください。



〒107-0062

東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館23階
公益社団法人 日本獣医師会 事務局
「第26回日本動物児童文学賞受賞作品集」希望

お問合せ：TEL 03-3475-1695 FAX 03-3475-1697
E-mail：hokankyo@nichiju.or.jp